

屋上観覧車

田中  
悠平

人物

森口 礼実 (30)

尾形 真一 (70) 礼実の義父

○商業ビル 外

昔ながらの商業ビルの外観。

○商業ビル 屋上

人気のない屋上。

少し曇った空。

不安そうな顔で一人たたずむ、森口礼実（30）。

尾形真一（70）が来る。

尾形「ああ、礼実ちゃんごめんね」

礼実「大丈夫そうですか……？」

尾形、険しい顔をする。

尾形「ああ、どうだろうな」

礼実は思い悩んだようにうつむく。

礼実「待つしかないですね……」

礼実はため息をつき、曇った空を見上げる。

○商業ビル 男子トイレ

思いつめた尾形の顔。

閉まった扉の前に立つ尾形。

尾形、扉を強く叩く。

尾形「おい！ 大丈夫か？ 大丈夫か？」

トイレの個室扉である。

○元の商業ビル 屋上

一転、吹き出して笑う礼実。

尾形は呆れたように首をかしげ、

尾形「もう四十近い息子相手に、トイレで声かけるとか勘弁してほしいよな。あいつ全然返事しないし」

礼実は少し期待したように笑い、

礼実「それ、ちゃんと個室あつてました？ ま

さか他の人なんじゃ……」

尾形「ああ、もう出る……って小さい声で聞

こえたから大丈夫」

礼実「どっちの出るなんだか……」

笑う尾形と礼実。

尾形「まあ、大丈夫じゃないかな。どうせだつたら、風にあたってたほうがって、屋上

いくぞって言ったんだけど、いいって」

礼実「なんか食あたりですかね？」

尾形「いやさつき、食い意地張って食べまくってたからだろ……ったくもう」

礼実「たしかに、めっちゃ食べてましたね」

尾形「いっつもあんななの？」

礼実「はい」

苦笑いの尾形と礼実。

笑い止んで気まずい沈黙。

尾形「それで……よかったの……？」

礼実「はい……？ 何がです？」

尾形「いや、このまちに来てもらうの」

礼実「ああそれは全然です。私職場が新宿なので、一本でいけるし、朝座れてラッキーですよ」

尾形「そっか……なんかごめんね。女房に先立たれて、一人残った親父なんて、お荷物だよね」

礼実「そんなことないです。お荷物はせつかくのお出かけなのにトイレに籠ったまま

の人ですよ」

笑う尾形と礼実。

笑い止んでしばらくの間。

礼実「逆にいいんですかね……」

尾形「え、どうしたの？」

礼実「いや、なんていうか……」

尾形「うん……」

礼実の顔から笑顔が消える。

礼実「実はまだ、ちゃんとプロポーズされて  
いなくて……」

尾形「はあ!？」

礼実「いやなんかよくわかんなくて、ふわっ  
としてたつていうか」

尾形「あいつ、何やってんだ、それでここに  
連れてきたの？」

尾形の怒った顔。

礼実は慌てふためき、

礼実「そんな、怒らないでください!」

尾形「いいや意味わかんないでしょ、勝手に  
ぎる! この後あいつ出てきたらここで

ちやんとさせるから！」

礼実「いやいやそんな、させられるものではないと思うんですよ！」

尾形「いいや駄目だ、男にははじめを付けな  
きやいけない時がある！」

礼実、少し動き回り、

礼実「そんな心の準備が！」

尾形「何言ってるんだよ礼実ちゃん、もうここ  
まで来てるじゃないか」

礼実「そうです。そうですけど、もつとちや  
んとしたところで、こんなところじゃ……」

尾形「うん……まあ二人のことだからな……」

沈黙が続き、気まずいムード。

礼実「そうだ！ お義父さんはお義母さんに  
どんなポーズしたんですか……？」

照れたように笑う尾形。

尾形「そんなやめろよ」

礼実「ええ、教えてくださいよ」

尾形「そんな覚えてつかよ」

礼実「覚えてるくせに」

盛り上げるために煽る礼実。

困った尾形は真顔でつつこむように、

尾形「いやここなんだよ」

礼実の顔が固まる。

礼実「え……」

尾形「さっき言ってた、こんなところ」

尾形、周囲を指さす。

礼実は周囲を見渡し、

礼実「え、ここで……」

尾形「昔、このビルがもつと栄えていた時に

この屋上は遊園地みたいになってさ」

礼実「ああ、テレビで見たことあります。昭

和のデパートですね」

尾形「そうそう、昔ここもそんな感じで、小

さい観覧車があったんだよ」

礼実「そうだったんですね、すみません……」

尾形「いいやいい、もう跡形もないからな」

気まずい沈黙。

礼実「それで……ここでなんと？」

尾形「いや聞くんだ」

礼実 「よけい気になりますよ」

尾形は周囲を見渡し、

尾形「そこにあつた観覧車に乗ってるときに、  
向こうに見える富士山と、あっちに見える  
江の島見て、これ一緒に見えるの奇跡です  
ねって」

礼実 「え、ここから富士山も江の島も見えて  
たんですか？」

尾形 「ここが一番高かったからな」  
うっとりする礼実の顔。

礼実 「へえ。で、なんと？」

尾形 「ここ出た後も一緒にいましょうって」  
沈黙。

礼実 「え？ それだけですか？」

尾形 「おう」

尾形の誇らしげな様子。

礼実、不思議そうに、

礼実 「え、それ伝わってます？」

尾形 「いや、伝わってるだろ」

礼実 「いや、もう少し言わないとわからない

んじゃないですか……？」

尾形、身振り手振りで必死に、

尾形「いや、観覧車つても当時のだから小さいのよ、ゴンドラなんて十個もなかったんじゃない？」

礼実「それは言い訳にはならないでしょう」

尾形「一周なんて一瞬なんだって」

礼実「いやだから出たここで言ったらよかったですじゃないですか？」

礼実、後悔したように顔をしかめる。

気まずい沈黙。

尾形「いやなんか、心配になってきた」

礼実、気まずそうに、

礼実「すみません、こんなところでプロポーズは嫌だとか言ってたやつが」

尾形「なんで今更プロポーズが伝わってたか気にしないといけないんだ」

天を見上げる尾形。

礼実は少し笑い、

礼実「お義母さんに聞いてるんですか？」

尾形「ああ、伝わってなかったみたい」

笑う尾形と礼実。

礼実「引っ越さないかって」

尾形「え？」

礼実「いや、そう言われたんです」

尾形「なんだそれ、もうちよつとぴしつと」

礼実「親子ですね」

尾形の苦笑い。

礼実「でも素敵ですね、今も空見上げて想う

なんて。実際ずっと一緒にいたわけでも

んね。観覧車降りてからずっと。」

尾形、何かを思い出すように、

尾形「駅前来るたびにさ、あいつよくぼーつ

と、このビル見上げてたんだよ」

礼実「へえ」

尾形「何想ってたんだろうな。もう、そこに

観覧車もないのにさ」

礼実は目を細めて、尾形の横顔を見つ

める。

礼実「あれはなんだったんだ？　じゃないで

すか」

笑う尾形と礼実。

礼実「想いはめぐりますね。今でもお義父さんのなかで」

尾形、自らの腹で円を書くようになぞって、

尾形「あいつはまだ腹の中ぐるぐるしてんのか？」

礼実「さあ」

笑う尾形と礼実。

少しの間。

尾形「変な奴だけどよ。ここ出た後も一緒にいてやってよ。ずっと」

礼実「はい、何周でも」

少しの間。

尾形、振り返り、笑顔になる。

尾形「ああ、帰ってきたバカ息子」

礼実、振り返り、笑顔になる。

礼実「もう、大丈夫？」

(完)